

# 関西View

## 時の回廊

### 町人の道しるべ今を導く

儉約、勤勉、家業への精励を重要な徳目と説き、江戸中期に町人らを中心に広まった「心学」。石田梅岩(1685~1744年)が神道、仏教、儒教を融合させて生み出

した独特の生活哲学だ。商業主義を蔑視しがちな当時の社会風潮に反し、「商人の買利は士の禄に同じ」と意義づけた。日本の経営のパックボーンともなった思想は、経済の低迷期に臨んで注目を集め続ける。

が男女別々の位置に陣取り、梅岩とも弟子の手島堪庵(1718~86年)ともされる先生の話に聞き入っている。絵にある先生用の座席「心学講座」が梅岩の生誕地、京都府亀岡市の同市文化資料館に残る。脚の付いた座椅子の形で、背もたれに綱が巻かれたシンプルなたしサインながら時を刻んだ風格を感じさせ、席上から「先祖や親を敬う」

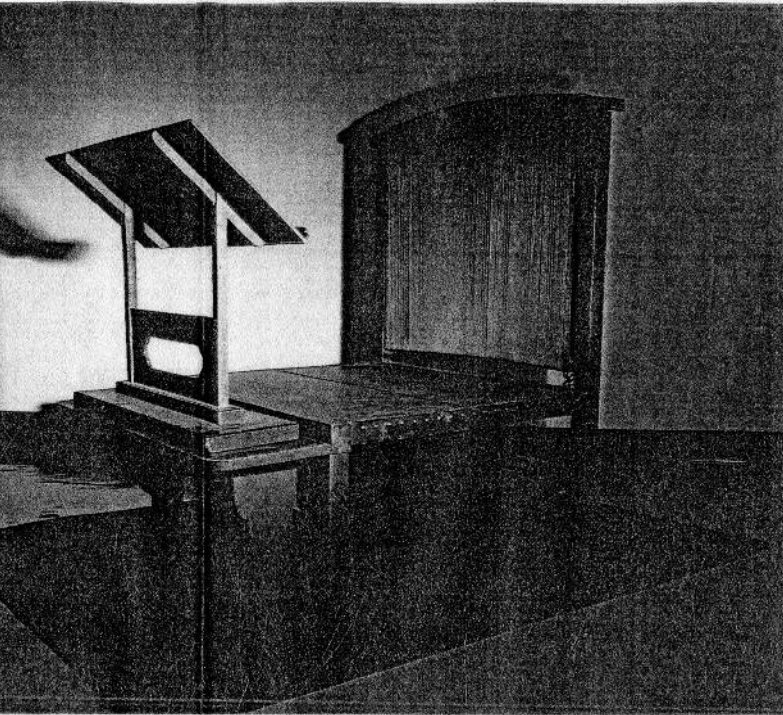
「嘘をつかない」などと説く姿を彷彿とさせる。同館の企画展などの際に展示される。「無私の心」核に梅岩は亀岡の山あいの村に農家の次男として生まれた。京都の呉服商などに奉公しながら様々な学者らの元で聴講を続け、30代後半で禅僧に師事。2度にわたり「悟り」を得て、44歳で初めて人を前に

して教えを語り始めた。その眼目は「心」を知る。心とは天地や万物と一体化した私のない心であり、社会や私欲の秩序そのものだ。この心を知ることで儉約や家業への精励の価値に気付く。実践につながる。評論家の加藤周一は、心学誕生の背景をこう分析した。「元禄期の町人は、現世主義に基づき一種の享楽主義を発

展させたが、梅岩は同じ現世主義を禁欲に結びつけ「町人ノ道」を展覧させた。時代は、大名への貸し付けなどを通じて政治・経済への商人の影響力が強まった享保年間。徳川吉宗による様々な儉約策も追い風になった。「富の主は天下の人々なり」「(商人は)天下の財宝を運用して、万民の心をやすむる」、商人道の実践では「先祖も立ち、私も立つことを思うなり」。私利を離れるよう説く心学の教えを、梅岩の死後も60以上の藩の大名や家老が学び、寛政の改革で知られる松平定信が設けた人足寄場では無宿者らの教化に用いた。

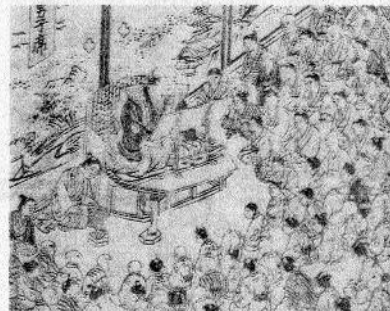
#### 不景気時に脚光

最近では2008年のリーマン・ショック時、「グリーンド(強欲)」に対する思想としても注目を浴びる。石田家の末裔、石田二郎さん(82)は今も梅岩の生誕地に居住し、社会貢献活動に汗を流しつつ、この地にある梅岩記念館や小公園を管理する。「いろんなサークルや団体の方も来られるし、個人でフラッと立ち寄られる方もいる。いずれにしろ不景気になると増えますね」と笑う。梅岩の墓は京都・東山に立つ。石田さんも時折訪れているが「塋の一部が壊れたりしている。いつの間にか誰かが直してくれる」。信奉者は今も多し。経済政策を巡り論争が続く現代、梅岩なら、どんな感言を漏らすだろうか。



石田梅岩らが使用していたとされる「心学講座」(京都府亀岡市)

#### 梅岩が開いた「心学」の講座 京都府亀岡市



「前訓」挿図(安永2年版、京都・明倫舎蔵) 一亀岡市文化資料館保管



市文化資料館 JR山陰本線 亀岡駅 ガレリアかめおか 京都学園大学 与能神社 京都自動車道 亀岡市文化資料館はJR亀岡駅から徒歩約5分。梅岩生誕地は同駅からタクシーで約20分。梅岩記念館は不定休。

亀岡市でも経済団体などが協議会を組織し、梅岩や心学への理解を深めてもらい、町おこしにつなげようとする。JR亀岡駅前には梅岩像が鎮座し、訪れる人を出迎える。道の駅「ガレリアかめおか」には心学講舎が再現されている。

2009年には梅岩が京都で初めて講舎を開いて280年になるのを記念し、JR亀岡駅から梅岩の生誕地まで約11キロを「石田梅岩心学の道」として整備した。

路傍に心学の教えを記した案内板や石碑が立ち、平易な語り口で庶民を導いた思想に触れることができる。与能神社から4キロほどは森に囲まれ、静かな雰囲気味わえる。梅岩をモデルにしたゆるキャラも11年に生まれた。林彦の実直そうな表情の「しんがくん」だ。各種イベントに現れて市民に親しまれている。

#### 生誕地の町おこしに一役

市井の人らを集めて心学を教える「講舎」は江戸時代、全国に200近くあったといわれる。現在では数少なくなったものの、一部の講舎の後身が活発に活動を続ける。その一つが大阪市浪速区の「心学明誠舎」。経営者ら180人の会員を擁し、勉強会などを毎月開いている。



「石田梅岩心学の道」は与能神社から森に囲まれる(京都府亀岡市)

#### 阪神間モダニズムの記憶 ④

菅屋市立美術博物館の館長を務める廣瀬忠子さんは、菅屋に住み始めて足かけ80年になる。「40層ほどの応接間にグランドピアノが2台置かれ、ホームコンサートを主催していました。クリスマスには120人ぐらい集まりましたよ」。父が商社マンだったため幼い頃は中国やインドで暮らしたが、美母を早くに亡くし、菅屋に住んでいた叔母の養女になったという。美父は清洲のラストエンペラー、海軍ともつきあいがあり、一緒にゴルフをした写真が残る。菅屋の養父は有名な産婦人科医だった。

#### 豊かな生活、小説のよう

パーティーではオペラを得意とする母が歌い、ロシアからの亡命貴族がピアノの伴奏をしたという。谷崎潤一郎の「細雪」とそのままだてきそな生活だった。戦後は一團派手になる。母が日本赤十字やユネスコの役員をしていた関係で、しばしば著名人や皇族の訪問を受けた。自宅の応接間には後にインドの首相となるインディラ・ガンディーから贈られた象の骨飾りから飾られている。阪神間の文化の源泉はその豊かさにあるのだろう。廣瀬さん自身、生け花の温故流家元だ。500坪(約1.6550平方)の自宅敷地には桜の木が植わり、春は花見のため近所の人に庭を開放した。その廣瀬さんが1000坪の敷地に「アリスコート」のある大きな家がいくつもあったというから驚くしかない。かつての自宅には今も5階建てのマンションが建ち、廣瀬さんはその一室に住む。

#### 軌跡



廣瀬さんの自宅には清洲最後の皇帝・溥儀と「ゴルフをする美父の写真など飾られている」

電子版にバックナンバーを掲載。Web刊「特集・関西発」

写真 玉井良幸